

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：23503

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K11119

研究課題名（和文）空き家を活用した世代間交流プログラムの構築

研究課題名（英文）Building an intergenerational exchange program using vacant houses

研究代表者

渡邊 裕子（Watanabe, Yuko）

山梨県立大学・看護学部・教授

研究者番号：40279906

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、空き家を活用した世代間交流が継続的に実践できるプログラムの構築を目指した。空き家周辺住民と大学生の社会貢献・世代間交流及び地区内の「空き家」に対する意識の実態を明確にした上で、地域在住高齢者と学生が協働で活動拠点の空き家を整備するとともに、地域特性(魅力)発信や高齢者の健康づくりプログラム等を企画・実践・評価する中で、対話を通じた自然な多世代間交流が定着した。研究期間中に発生した新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けたが、地域の中にある空き家を活用し、多世代が対話の中から様々な事業を協働で企画・実施することが、自然かつ継続的な世代間交流プログラムに繋がること明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、日本一空き家率の高い山梨県において、地域で生活する高齢者と大学生（若者）が、身近にある空き家を活用して、協働事業の企画・運営を一から行った。その過程で、近隣住民も含めて対話の機会を多く持つことができ、参加者が協働した街づくりに対する意識を醸成することに繋がった。単発の活動プログラムではなく、多世代が対話の中から様々な事業を協働で企画・運営することで、自然で継続かつ発展性のある世代間交流プログラムが定着できたことは、社会的な意義が大きいと考える。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to build a program that can implement ongoing intergenerational exchange using vacant houses. After clarifying social contributions, intergenerational exchanges, and awareness of the actual conditions of vacant houses in the community of residents living near vacant houses and university students, elderly community residents and students worked together to maintain vacant houses as activity bases. As they planned, implemented, and evaluated programs that communicate community characteristics (appealing points) and promote health for the elderly, natural multigenerational exchange was established through dialogue. Although the study was impacted greatly by the COVID-19 pandemic, which broke out during the study period, it became clear that using vacant houses in the community with multiple generations working together through dialogue to plan and implement a variety of projects led to a natural and ongoing intergenerational exchange program.

研究分野：老年看護学

キーワード：世代間交流 空き家 高齢者 大学生 地域住民

1. 研究開始当初の背景

少子高齢化の進展を背景に地域内はもちろん家庭内での繋がりも希薄化する現代社会において、「世代間交流」への関心が高まり、「世代間交流プログラム」が活発化してきている。しかしながら、これらのプログラムは単発のイベントとして行われているのが現状で、継続性に課題を残している。我々は、平成 21 年度から大学周辺地域在住の高齢者が看護専門職者を目指す学生と授業の中で交流するというプログラムを実践し定着している（渡邊ら、2010）。交流を通して双方の距離感が少なくなり、高齢者は学生が知恵の伝授を求めていることを実感し、学生は地域に興味を持って社会参加する意義を見出している（渡邊ら、2014）。しかし、生活圏内で自然かつ継続した交流までには至っていない現状がある。

一方、山梨県は全都道府県で唯一空き家率が 20% を上回っており（総務省、2018）地域課題のひとつとなっている。我々は、平成 27 年度から文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生事業（COC+）」の CCRC（Continuing Care Retirement Community）コースを担当し、実践的教育カリキュラムの構築を目指し、「生涯活躍の街」をキーワードに、山梨らしい取り組みを模索する中で、“空き家”の活用に注目した。地域で生活する高齢者が、地域の中にある大学の学生と地域の中にある“空き家”を活用して協働して事業を企画・運営することで、高齢者は「若者に知恵を伝授する」という役割認識をさらに強化できると共に、学生や地域住民は高齢者が持つ力に気づき、それを発揮できる街づくりを共に行っていくという意識や態度の活性化を目指すことができる。空き家を活用した新たな世代間交流プログラムの構築は、深刻化する超高齢社会の中で、継続的かつ発展的な波及効果をもたらすのではないかと考えた。

世代間交流に関する研究は、1990 年代にアメリカで行なわれて以来、日本でも 2010 年には「日本世代間交流学会」が設立されるなど、研究知見が蓄積されつつあり、今後は、継続的なプログラム展開により個人レベルの効果から地域レベルの効果への波及が期待されていた（村山、2018）。また、“空き家”を活用した活動プログラムは散見されるが、空き家を活用した世代間交流プログラムを扱った研究は見当たらなかった。

そこで、空き家を活用した新たな世代間交流プログラムが、参加する地域在住高齢者と大学生、及び空き家周辺地域住民にどのような効果をもたらすのかを明確にするとともに、継続的かつ発展可能なプログラムとなるための課題について、サービス科学の知見から学術的に明らかにしたいと考えた。本研究は、空き家率が全国 1 位の山梨県において先駆的な取り組みであり、研究で見出された効果や課題をもとに、さらに県内全体に波及を目指すとともに、超高齢社会に求められる、継続的で発展的な世代間交流プログラムを構築していきたいと考えた。

2. 研究の目的

空き家を活用した地域在住高齢者と大学生が協働する事業（以下、協働事業とする）が、高齢者・大学生・地域住民にもたらす効果と今後の課題を明らかにすることで、新たな世代間交流プログラムを構築する。

3. 研究の方法

1) 「空き家を活用した世代間交流」推進の基礎的資料を得るためのアンケート調査

活動拠点となる空き家がある 3 つの地区の 18 歳以上の住民全数および今回の事業に参加

資格のある大学生を対象に、社会貢献・世代間交流及び地区内の「空き家」に対する意識の実態を明確にする目的で自記式質問紙によるアンケート調査を実施(調査期間 2020 年 1 月 ~ 2 月)した。

2) 空き家を活用した協働事業の展開

調査結果を踏まえ、地域特性に応じた協働事業を展開する中で、協働事業が展開する過程と参加者の変化を観察し、世代間交流が定着するまでに重要となるポイントを明らかにする。

3) 今後の課題の明確化

参加者にもたらした効果の検証から、継続的かつ発展可能な世代間交流プログラムとなるための課題を明確にする。

4 . 研究成果

1) 「空き家を活用した世代間交流」推進の基礎的資料を得るためのアンケート調査(2020 年 1~2 月)

空き家周辺 3 地区に対して合計 399 通の調査票を配付し、212 通の回収が得られた(回収率 53.1%)。居住地区と空き家に対する考えが未記入であった調査票を除外し、197 名を有効回答とした(有効回答率 49.4%)。対象者は女性が 51.8%と多く、平均年齢は 67.3±15.2 歳で、70 歳以上が半数以上を占めていた。他者と話す機会については、「身内以外のシニア世代(64.9%)」で、若者世代とは「別居の身内(36.7%)」「身内以外(29.6%)」ともに少ない傾向にあった。社会活動では「自治会活動(70.8%)」「奉仕・ボランティア活動(45.2%)」、役割では「家での役割(83.9%)」「仕事での役割(63.8%)」の順で多かった。空き家に対する考え方を「地区内に空き家があると〇〇」の形で質問したところ、「寂しい(72.4%)」「災害時に何かあったら困る(66.3%)」の順で多く、「移住者の使用を歓迎(58.8%)」の一方、「旅行者の使用には抵抗感がある(40.7%)」もあった。空き家活動への参加意思では「活動内容によって(60.3%)」「時間があれば(35.2%)」で「参加しない(10.1%)」であった。

一方、大学生 575 名には調査票を配付し、470 名から回収が得られ(回収率 81.7%)、467 人の有効回答を得た(有効回答率 81.2%)。他者と話す機会は「身内以外の若者世代(82.7%)」が多く、シニア世代と話す機会は「別居の身内(53.6%)」「身内以外(24.9%)」であった。社会活動では「趣味活動(56.5%)」が多く「自治会活動(11.3%)」は少なかった。空き家に対する考え方では、「寂しい(56.3%)」「移住者の使用を歓迎(57.2%)」「旅行者の利用歓迎(46.5%)」の順で多く、空き家活動への参加意思では「活動内容によって(42.0%)」「時間があれば(40.0%)」で「参加しない(6.4%)」であった。

本調査では、地域住民、大学生ともに他世代との交流は少ない傾向にあり、空き家に対する考え方では、防犯上や災害時の心配に加え、寂しさや地域が衰退していくのではないかとという心配を感じている割合が高かった。地域外者が空き家を活用することに対しては若干地域による差があり、特に旅行者が使用することに対しては抵抗感がある割合が高い傾向にあったが、空き家を拠点とした活動には、「内容」「時間」「報酬」という条件はあるものの、参加意思を示している人が多かった。世代間交流プログラムの構築に向けては、時間に縛られず参加しやすい日時の設定や、何らかの報酬が得られる活動内容の検討も求められる。また、住民・学生双方にキーパーソン存在は不可欠であり、リーダーを中心に住民と学生が対話を通じて活動の企画・運営ができる環境を整えることが課題であるが、日頃話す機会の少ない住民と学生が対話の機会を多く持ち、協働で事業を推進することの意義と重要性は示唆された。

2) 空き家を活用した協働事業の展開

2020年1月にわが国で最初の感染者の報告があった新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、数か月で世界的大流行(パンデミック)となり、行動制限があり大学もオンライン講義を余儀なくされたことから、本研究の遂行は困難を極めた。活動を予定していた3か所の空き家を管理しながら交流できる機会を待ったが、3年以上に及ぶ制限下で3か所での活動は難しいと判断し、ゼミ活動で交流のあるB地区に絞って事業を行った。

B地区は山間部にあり42世帯18歳以上の住民は71名が生活している。少子高齢化や都会への若者流出の影響で、人口減少が進んでいるが、豊かな自然と人との繋がりを大切にす文化に魅力を感じて、県外から移住者して地域に根差して生活している人もいる。拠点となる空き家を利用した大学のゼミ活動にも地域で協力しており、高齢者と大学生の交流もある地区である。活動拠点とした空き家は築200年の古民家で、地域外に住む親族によって物置として使用されていたが、50年ほど空き家の状態であった。「代々家族間で受け継いで来た資産であり、仏壇も所有しているため他者への貸与には抵抗があった」というが、地域の活性化と将来を担う学生の学びのためにと、縁側のある一部を整備して利用することに同意をいただいた。

年度ごとの活動状況は以下のとおりである。

(1) 2020年度

7月に国際政策学部の学生が中心となって空き家の大がかりな清掃活動を行ったが、近隣の住民が声をかけてくれたり、床をはがす作業を手伝ってくれたりと協力的であり、その後に開催した交流会には20人以上が集まって、学生や地域の住民同士の楽しい時間を過ごした。また3月には学生が企画して「活動報告会」を開催した。小学生から高齢者まで幅広い世代の住民が30人以上参加し、活動報告のあと「空き家を活用してどんなことがしたいか」についての意見交換を行った。「気軽にお茶してお話する」「地元料理を作り、飲む」「夜空を見る会」「手仕事の会」等の活発な意見が出される中、「町民の人々と交流をしたい」という世代間交流を望む貴重な意見もあった。

(2) 2021年度

地域住民(シニア世代・現役世代)と学生(若者世代)が、アイデアを出し合いながら協働でリノベーション(一部)を行った。また、引き続き活動拠点として活用できるように整備するため、学生がクラウドファンディングを企画し、地域の地域住民(シニア世代・現役世代)との対話により地域の特産物を返礼品として選定した。これらの過程を通して、対話を通じた自然な多世代間交流ができたと評価できる。

(3) 2022年度

クラウドファンディングで獲得した資金を活用して、2021年度に引き続き、地域住民(シニア世代・現役世代)と学生(若者世代)が、アイデアを出し合いながら協働で空き家のリノベーションを行った。また、返礼品である地域の特産物を、地域高齢者の知恵と熟達した技能を学生が伝授していただく形で数カ月をかけて製作し、さらに自然で対話のある多世代間交流ができた。また、3年間続けて活動に参加した学生が卒業研究として「空き家活用が過疎地域にもたらす影響について」をまとめた。その中で、住民24名の協力を得て世代間交流の現状について調査し、2019年度に行った調査結果と比較したところ、どの世代も身内以外との交流機会が増えており、特に「身内以外の若者世代と話す機会は23ポイントと大幅な増加がみられ、本事業を通じた世代間交流が定着してきていることがうかがわれた。

(4) 2023年度

リノベーションが完了した空き家を地域住民が内覧しその後意見交換するイベントを開催した。また、市教育委員会と協働して空き家を拠点にした文化財ツアー等を実施し、地域外の多世代が学生や地域住民と交流する機会を設けた。5年間の継続した活動をとおして、地域住民と学生の世代間交流は定着し、さらに空き家が地域外の人々との交流拠点となっていることから、空き家を活用した世代間交流の基盤は構築できたと考える。

3) 今後の課題の明確化

本研究では、空き家を活用した世代間交流が継続的に実践できるプログラムの構築を目指した。空き家は地域の中で身近な場所であり、ここが交流の拠点となれば、公共施設のように使用目的に縛られず、住民が自由に主体的な活動に利用することが可能になる。しかし、拠点として整備するまでには、様々な課題があった。

まず、所有者の理解と協力である。愛着があり大切な財産である空き家を他者の手に委ねることが容易でないことはよく理解できる。今回のケースは、地域住民の中に空き家の価値をしっかりと認め、地域の財産として蘇らせ、所有者と一緒に管理していくという意識を持ったリーダーとなる人がいたことで、所有者の理解を得ることができた。学生が地域の中で活動できるように住民と橋渡しをしてくれる存在でもあり、地域の中にキーパーソンが存在することは、ひとつの大きな条件であり課題である。

本研究では、既存の世代間交流プログラムを提供するのではなく、参加者が協働で一から考えて活動することで、単発のイベントではない継続性のある交流に繋げていくことを目指した。最初の段階で、地域住民に活用のアイデアを募る意見交換会を実施したこと、リノベーションに住民の意見を聞きながら一緒に参加してもらったこと、さらにはクラウドファンディングの返礼品として地域の特産物を選定し、地域の知恵と熟練した技術を伝授してもらいながら一緒に創作したことが、相互理解を深め、信頼関係を築くことに繋がったと考える。柴田は、サクセスフル・エイジングを「よい人生を送り天寿を全うすること」と表現し、構成要素として長寿・高い生活の質(QOL)・社会貢献(Productivity)を挙げている(柴田:2003)。社会貢献の構成要素には有償労働、無償労働、相互扶助、ボランティア活動、保健行動(self-care)が挙げられ(Kahn, 1983)。高齢者が家庭内にある家事や家庭菜園といった無償労働に加え、地域の中で若い世代に知恵を伝授していくという役割を認識できることは重要である。今回の活動では「知恵の伝授」が相互理解に大きく貢献したと言え、さらに経済的な報酬にも繋がったことも効果を大きくしたと考える。また、今回参加した学生は、ゼミ活動が参加のきっかけとなっていた。授業やサークル活動と連動した導入の機会が必要であり、学生の中にもリーダーとなる人の存在は不可欠であった。

本研究をとおして、多世代が地域にある資源の価値に気づき、たくさんの対話をとおして相互理解を深めながら様々な事業を協働で企画・実施すること、さらにそれが「知恵の伝授」という要素を含んで経済効果も伴うような活動であることが、自然かつ継続的な世代間交流プログラムの定着に繋がることが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 渡邊裕子・小山尚美・杉山歩・安藤勝洋・茅野久美・和田典子	4. 巻 7
2. 論文標題 地域住民の社会貢献・世代間交流の実態と居住地区内にある「空き家」に対する意識～「空き家を活用した高齢者と大学生の世代間交流」の拠点となる3地区住民への調査から～	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山梨県立大学看護学部・看護学研究科研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 75-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 茅野久美・渡邊裕子・小山尚美・杉山歩・安藤勝洋・和田典子
2. 発表標題 大学生の世代間交流と空き家に対する意識の実態調査
3. 学会等名 日本老年看護学会第26回学術集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

山梨県立大学地域研究交流センター第4回SDGsフォーラム「空き家対策シンポジウム」シンポジスト（2023.2.23）
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	杉山 歩 (Sugiyama Ayumu) (20586606)	山梨県立大学・国際政策学部・教授 (23503)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	安藤 勝洋 (Andou Katsuhiro) (20424294)	山梨県立大学・国際政策学部・教授 (23503)	
研究分担者	小山 尚美 (Koyama Takami) (80405117)	山梨県立大学・看護学部・准教授 (23503)	
研究分担者	茅野 久美 (Chino Kumi) (20816433)	山梨県立大学・看護学部・講師 (23503)	
研究分担者	和田 典子 (Wada Noriko) (60764321)	山梨英和大学・人間文化学部・研究員 (33503)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関